

# 君山狩野直喜先生小傳

高田時雄

## はじめに

京都の文科大学草創期にあって、やがて中國學の京都學派と呼ばれる學統の建設に主導的な役割を果たした代表的人物は、疑いなく狩野直喜であろう。

狩野直喜、字は子温、君山また半農人とも號した。一個の人物には時代を背負うということがある。人は各々その時代に制約されるとともに、また時代によってその眞價を鮮鋭に發揮する。學者といえども決して例外ではない。狩野直喜の場合も正にそのとおりであったと言えよう。狩野は明治元年の出生であるが、まさに明治という時代とともに生き、明治という時代にその學的形成を行い、時代に即した新しい中國學の樹立に成功したのである。狩野は明治元年生まれを示す「戊辰年生」という印章を愛用したが、恐らく時代の子としての自分を強く意識していたのではないかと思われる。しかし多くの明治の知識人がそのたましいの内にしまい込んだ矛盾を、狩野の場合も背負い込んでいたようである。

## 熊本時代と濟々巒

狩野は明治十二年十二月、當時熊本に創立されたばかりの同心學舎に入學し、同十七年にその後身たる濟々巒を卒業している<sup>1</sup>。明治二十一年に書かれた『濟々巒歴史』<sup>2</sup>に附載される「濟々巒卒業生名録」(自明治十五年二月至全廿一年五月)に「狩野直記」の名が、明治十七年十月十日卒業として載っている。濟々巒という學校は明治十年の西南の役ののち、戦火に焼かれた荒廢した市街と、疲れ切った郷里の人々を目の當たりにして、佐々友房が今後國家を救済する道は、教育を振興し、有爲の青年を育成するにあるとして、同志を糾合、諸方に周旋して始めた私立學校であった。その創立の精神はといえば、舊藩校時習館以來の儒教的傳統を受け継ぎながら、武士道精神を掲げて擊劍や軍隊式の體操などを課し、また皇室中心主義を唱えるという、當時の官立の學校が、文明開花の波に乗って西洋風の個人主義自由主義を鼓吹するのは、まったく逆方向の反動的ともいえる主張を掲げていた。この極めて特異な校風をもった濟々巒で多感な數年間を過ごしたことが、のちの狩野の精神的形成に與って大きな力があつたと想像しても、それは決して大きな誤りとはいえないであろう。狩野の實弟直次も濟々巒で教鞭を執つたことが知られ、狩野家の人々が濟々巒の主義主張に強い近親感を抱いていたことを思わせるのである<sup>3</sup>。

さて注目すべきは、同心學舎及び濟々巒では、當時としてきわめて異例のこととして、中國語・朝鮮語の教授を行っていることである。それは日本が、文化歴史の上で深い關係を有する中國や

<sup>1</sup>同心學舎は明治十四年一月、同心學校と改稱したが、後援してくれていた會社の倒産によって經營危機におちいり、同十二月に廢校。十五年二月新たに濟々巒が発足した。

<sup>2</sup>佐々友房稿。全八十二頁。草創期濟々巒の根本資料である。

<sup>3</sup>『濟々巒歴史』の末尾に掲げられた「濟々巒外塾現時役員教員名録」に「教員(英語)狩野直次」とあるが、この人は狩野の實弟であり、狩野の手になる「家系述略」(昭和壬午正月定稿、「狩野君山先生略譜」末尾に附載)に「松彦、後改直次、出繼八木田氏」とある人物である。

朝鮮と連携を深めることで、衰退するアジア全体の勢力挽回を計るための布石でもあった。佐々の『濟々覺歴史』には「(明治十四年)二月校員諸氏ト議スル所アリ將來ノ國運ヲ想像シ本邦ト支那、朝鮮トノ關係密接ナルヘキヲ察シ我校課程ノ外二生徒ノ冀望者ヲ募リ兩國ノ語學ヲ學ハシメント欲シ十數人ヲシテ支那語ヲ熊本鎮臺支那語學教師榊木某ニ學ハシム」とある<sup>4</sup>。これは濟々覺創立に先立つ同心學校時代のことであるが、濟々覺として新たに發足した後もこの方針は変わらず、支那語學の一科を設け学生の募集を行っている<sup>5</sup>。その教員には最初上林大三郎があたり、明治十七年學科改正とともに御幡雅文<sup>6</sup>にバトンタッチされた。明治十五年五月十一日付『熊本新聞』に「今般本覺に於て、東京興亞校卒業上林大三郎氏を聘し、支那語學(官話)相始候」という広告が載せられており、上林が興亞會の支那語學校卒業生であったことがわかる<sup>7</sup>。狩野が濟々覺で中國語を學んだという明らかな證據はないが、しかし學問的興味の旺盛な狩野がまったくこれに眼を向けなかったとは考えにくい。後年、狩野は佐々の業績を記して、「早くから中國・朝鮮は我が國と關係が密接であることを思い、この兩國語の學科を設置して生徒を選び學習させ、また旅行をして形勢を見ることを薦められた」<sup>8</sup>と述べていることからすれば、少なくともこの兩外國語の開講には大きな關心を持っていたものと思われる。興亞會というのは曾根俊虎らが東京で結成した團體であり、中國と合從してアジアの衰勢を挽回せんとする主張をもって、早くから中國語の講習に力をそそいでいた。明治十年二月十三日、會の結成されるや、同月の十六日には興亞會支那語學校を西ノ久保巴町五十九番地に開設し、清人張滋昉を教師に招請した<sup>9</sup>。その興亞會の會長は舊熊本藩主細川護久の實弟、長岡護美であった。長岡は、濟々覺の有力な後援者の一人でもあり、したがって興亞會のアジア主義が濟々覺に大きな影響を與えていたことは疑いを入れない。興亞會の卒業生が濟々覺中國語教員として招聘されたのは蓋し當然といえよう。ちなみに、狩野はのち東京に出て大學豫備門(一高)で學んでいた頃、一時長岡子爵家の書生となっている<sup>10</sup>。

濟々覺という學校は、狩野一人にとどまらず、多くの分野で中國に関わる人材を輩出してきた。學問の世界だけを取り上げて、ほかに最初の中國文學史たる『支那文學史』の著者として知られる古城貞吉がいる。古城は濟々覺および一高で狩野と同級であった。またやや後輩に、東京大學で中國哲學を講じた宇野哲人がいる。さらにほぼ同じ時期濟々覺に學んだ人物として松崎鶴雄(慶應三年~昭和二十四年)の存在も忘れてはなるまい<sup>11</sup>。卒業後の經歷は狩野とはまったく異なるものの、人生のすべてを中國に捧げたという意味では一脈相通ずる處がある。こういった人々が生み出されたのには、おそらく濟々覺の獨特の校風が大きく與っていると考えられる。

## 東京遊學

濟々覺卒業後、狩野は東京へ出て、同郷の先輩木村弦雄家の書生となり、まず共立學校(在學中東京開成學校と改稱)で英語・數學を學んだ。英語教師には高橋是清がいたという。苦學しつつ、大學豫備門(第一高等中學校)に入り、明治二十五年卒業、ついで東京帝國大學文科大學漢學科に

<sup>4</sup> 『濟々覺歴史』頁十七。

<sup>5</sup> 明治十五年二月四日付『熊本新聞』に掲載された學生募集廣告。『濟々覺百年史』(熊本、濟々覺百周年記念事業會、一九八二)頁三五。

<sup>6</sup> 御幡は當時熊本鎮臺の中國語教師をしていたが、そこで荒尾精と知り合い、のち荒尾の日清貿易研究所(上海東亞同文書院の前身)中國語教師となり、多くの中國語教本を世に出した。安政六年~明治四十五年。

<sup>7</sup> 『濟々覺百年史』所引、同書頁三五。

<sup>8</sup> 「夙思清韓與我、關係緊密、設兩國語科、選生徒學習、且勸遊歷、以覘形勢」『君山文』卷五「佐佐先生胸像記」。

<sup>9</sup> 『興亞會創立の歴史』『興亞公報』第一輯、明治十三年三月二十四日。

<sup>10</sup> 「狩野君山先生略譜」、明治十九年の條。

<sup>11</sup> 松崎は狩野より一歳年長であるが、濟々覺には狩野より遅れて明治十四年に入學、卒業を待たず十六年に青森縣書記官として赴任する古莊嘉門副覺長に伴われて上京し、獨逸協會學校に入學。その後各地を轉學し、やがて中國に渡って王闓運、葉德輝等の門下で學んだ。滿鐵顧問として大連圖書館の蒐書を指導し、在留日本人のあいだに深い影響を與えた。『吳月楚風』(昭和五年、出版科學總合研究所)に附載の杉村勇造「柔父先生略傳」を見よ。

入學した。帝大の漢學科の同期生には藤田豊八があり、後輩に桑原隲藏、高瀬武次郎らがいた。當時の東大漢學科の教授陣は、島田篁村、根本通明、竹添進一郎といった人々であったが、とりわけ島田篁村に私淑し、清朝風の考證學を受け継いだ。小島祐馬は「東京大學で篁村先生の教を受けた人は多数有ったであろうが、その考證學を繼承して之を發展せしめたのは、狩野先生を措いて外にはなかった」といい<sup>12</sup>、事實、同じく東大で島田を師と仰いだ高瀬武次郎も次のように証言している。「狩野博士の學系は、清朝考證學派である。日本にては大田錦城・海保漁村・島田篁村の系統を承けて居る。狩野さんも私も島田先生の御教授を受けた。ケレドモ私は不肖もので、考證學に趨かず、陽明學廣くは宋明性理學、支那哲學を主とした。」<sup>13</sup>後年、京都大學において内藤湖南とともに清朝考證學を鼓吹し、それをバックボーンとしていわゆる京都シナ學をうち立てる基礎がこの時代に築かれたのである。しかし學生として長く身近に接した小島祐馬は、「宋學者の方は學問と修養とを同一視する故、人物の點よりいえば宋學者に偉人が多い」、また「漢學者は概して學問を一つの道樂とし、之を客觀的に取扱うので人物はツマラヌ者が多い」という狩野の發言を紹介しながら、學問上では考證學者として確乎たる信念を貫いた一面、實踐家としては宋學者風のところが少なからずあったという。おそらくは狩野自身でも理念と實踐とのあいだの自己矛盾には、多少氣が付いていたであろう。しかし宋學者風の一面というのは幼少期の教育環境によって養成され、たましいの奥深くに出來上がってしまったもので、學問的信條として獲得した考證學の立場からは如何ともしがたいものであったに違いない。そもそも肥後熊本における學問の傳統は寶曆年間(1751-1764)の秋山玉山から始まったもので、その玉山は林家の學統を承けた人であり、宋學が基礎を爲していた。玉山自身は必ずしも宋學一邊倒でなく、漢唐の注疏を讀むことをも推奨したといわれるが、やはり根底において宋學の深い影響を蒙っていたことは否定できないようである<sup>14</sup>。

## 中國留學および義和團事件との遭遇

明治三十三年四月、文部省の留學生として北京に赴いた<sup>15</sup>。近い將來創立されるはずの京都帝國大學赴任を前提とした留學であった。狩野が北京に到着したとき、當時東京大學助教授であった先輩服部宇之吉が同じく文部省の留學生として、前年の十月から滞在していた<sup>16</sup>。はじめ東四牌樓北六條胡同にある日本の老公館に居たが、不穩な情勢が日増しに高まってきたため、六月十日、服部とともに公使館に近い台基廠にある森海軍中佐の公寓に移った。同日、義勇隊が組織され義和團の攻撃に対する防備が強化される。翌十一日には、日本公使館の杉山書記生が清朝の官兵に殺害されるという悲劇が起き、十三日には中國人キリスト教徒の虐殺、教會の焼き討ちが始まり、騒然たる様相を呈してくる。いわゆる義和團事件であるが、以後、八月十五日まで、長く苦しい籠城が續き、その間、狩野も一歩兵として銃を手にした。また濟々鬘以來の同窓である古城貞吉も、當時た

<sup>12</sup>小島祐馬「通儒としての狩野先生」『東光』第五號、頁七。

<sup>13</sup>高瀬武次郎「君山狩野直喜博士を追慕す」『東光』第五號、頁六四。

<sup>14</sup>古城貞吉「狩野博士と私」『東光』第五號、頁七二。

<sup>15</sup>實は留學前、仙臺の二高に就職の話があったが、師の島田重禮は狩野に無断でこれを断ってしまったということがあった。有名なエピソードで倉石武四郎もこれを紹介しているが(「學問の思い出」倉石武四郎博士を圍んで、『東方學』第四〇輯(一九七〇)頁一六一) 狩野自身の筆によるとこういう事であったらしい。「喜既に大學を畢業し、尚都下に留まる。稟性多病にして又藥餌の資に苦しむ。親朋交々勸むるに地方官學の講席を以てす。喜心動き就きてこれを決せんと欲し、一日先師に造り謁す。乃ち喜を座に引き、經史を講説すること娓娓として倦まず、殆ど語りて他事に及ぶ能わざるなり。既にして曰く、某縣汝を聘して漢文教員に補さんと欲し、吾に囑して薦學せよと、吾、汝は方に銳意學に向かいたれば、僻邑書に乏しく又師友寡く汝の宜しく就くの地に非ずと謂い、吾已にこれを辭謝す。汝其れ益々奮勵して大成を期せ、貧賤は問う所に非ざるなり。」(「記先師篁村先生遺訓」『君山文』卷五。)さらに面白いのは、狩野はこの經驗がよほど印象深かったのか、それを真似てみたかったものと見え、弟子の小島祐馬にまったく同じことをやって見せた。「私自身(小島)京都で中學校の囑託教師をなとして居りました頃、地方の高等學校や専門學校の校長で私を取りたいといって先生の許まで来たものもあつたさうであります、その都度先生は「君は行きはすまいと言って断つて置いたよ」と後から報告せられるのが常でした。」(小島祐馬「狩野先生の學風」『東方學報・京都』第十七冊(昭和二四年)頁一六三。

<sup>16</sup>服部『北京籠城日記』、今、平凡社東洋文庫『北京籠城他』に収録されたものによる。その頁一一四。

またま東京日々新聞特派員としてこの地にあり、狩野とともに義勇隊の一員となっていたのも不思議な縁である<sup>17</sup>。日本人以外では、弱冠二十二歳のポール・ペリオ (Paul Pelliot) がフランス領事館に籠城しており<sup>18</sup>、フォン・ロストホルン (Arthur von Rosthorn) がオーストリア・ハンガリー帝國領事館の筆頭書記官としていたほか、タイムズ記者モリソン (George Ernest Morrison) 等もこの災難を経験した。この体験はさすがに深い印象を與えたものと見え、後年も興が向けばしばしばその話になったようで、董康は次ぎのように書いている。「狩野は満清時代の舊聞を話すのが好きであった。庚子の年にたまたま北京に留學していたら拳匪の亂が起こった。日本公使館では衛兵が二十人にも満たないために兵役に充てられた。聯合軍が入城すると柴五郎の部下に屬したのだという。そのころ私 (董康) は刑部主事の役職にあって、この事件の顛末をすべて目撃したし、監獄の接收やら首謀者の處罰なども擔當した。たがいの話を突き合わせるに、符節を合するごとくで、歸ったらもう夜半であった。」<sup>19</sup>

ともに文部省の留學生として事件に遭遇した服部と狩野は、二十数年の後、この事件の賠償金によって始められる對支文化事業の中心的役割を擔うことになるが、そのことについては後で觸れる。

## 上海留學と亞州文會

義和團事件のために留學の目的を完遂できなかった狩野は、翌明治三十四年八月再度中國に向かう。今度は戦亂で荒廢した北京を避け、目的地に上海を選んだ。上海は開埠以來すでに半世紀を過ぎ、歐米列強の據點として、また近代的な國際都市として發展しつつあった。上海には丁度、東大の同窓である藤田豊八が、羅振玉の主宰する東文學社に奉職していたが、その紹介で羅振玉と知り合った。羅振玉の言葉を借りれば、「光緒中葉、予の滬江に旅食せし時、狩野博士は適たま敝邦に留學せり。予が友藤田劍峯博士これが介となり、初めて相見えたり」ということになる。羅氏はまた「その氣を挹むに、沖然たる儒者にして、已に心にこれを異とせり」と述懐している<sup>20</sup>。藤田からは同時に王國維という優秀な學生のいることを聞いたが、その時にはついに會わず仕舞いであったという<sup>21</sup>。ちなみに狩野が王國維に會うのは、ほぼ十年の後、京大の同僚とともに敦煌寫本調査のため北京に赴いた時である。

上海には亞州文會という通稱で呼ばれていた王立アジア協會北中國支部 (North China Branch of the Royal Asiatic Society)<sup>22</sup>の圖書館があり、しばしばそこに出入し、收藏されるヨーロッパ東洋學の著作をあれこれと涉獵した。圖書館は、外灘から北京路<sup>バンド</sup>に入ってすぐ右に曲がった、博物院路 (Museum Road) 5 號にあった (現在の虎丘路)。博物院路の名稱は四階が博物館であったためだ

<sup>17</sup> 同上書、頁一三五。

<sup>18</sup> ペリオの日記はずっと後になって公刊されている。Paul Pelliot, *Carnets de Pékin, 1899-1901*, Paris, Imprimerie Nationale, 1976.

<sup>19</sup> 『書舶庸譚』民國十五年四月二十五日「狩野喜談滿清舊聞、庚子時適留學北京、拳匪之役起、日使署警衛不及廿人、曾充兵役、聯軍入城、隸柴五郎部下、維時余官刑部主事、於此事顛末、均屬目擊、且於接收監獄鑰匙禍首、亦承其乏、各證所聞、若合符節、歸時已夜午矣。」(但し「聯軍入城」とあるのは誤解であろう。)

<sup>20</sup> 「狩野君山博士六十壽綵」(丁卯九年六月)『稱觴集』(京都、一九二八)。

<sup>21</sup> 「王靜安君を憶う」『藝文』第十八年第八號(一九二七)。

<sup>22</sup> 一八五七年上海に創立された Shanghai Literary and Scientific Society が前身で、當初ブリッジマン (Rev. Elijah Coleman Bridgman) が會長を務めた。後、曲折を経て王立アジア協會の支部となった。その圖書館の蒐書は有名で、アレグザンダー・ワイリー (Rev. Alexander Wylie) の蔵書も収め、とくに歐文雜誌の完備していることを誇った。若き日のコルディエがその最初の目録を作成している。(H. Cordier, *A Catalogue of the Library of the North China Branch of the Royal Asiatic Society*, Shanghai, 1872.) 狩野が上海に居たのは一九〇一年であるが、その八年後の一九〇九年時點における蔵書の概要は *Catalogue of the Library of the North China Branch, Royal Asiatic Society, contained in the Society's Building*, (Shanghai, 1909) に見ることが出来る。ちなみにその蔵書のうち定期刊行物すべてを、大戦中の昭和十八年に日本が接收し、東京の民族研究所に運んだという。幼方直吉「上海文化の遺産—主として外國系の圖書館について—」『書香』第十五卷第四號(昭和十八年) 頁三五。戦後京都大學に移管されていたこれらの圖書は、一九四七年四月、中國側に返還された。松本剛『略奪した文化』(一九九三年、岩波書店) 頁二三七-八。

が、図書館は建物の二階部分を占めていた。學生時代からヨーロッパ中國學の著作に親しんだ経験もあり、それに大きな興味を抱いていたから、この図書館の豊富なコレクションには大きな吸引力があったものと想像される。エドキンス（Joseph Edkins）をはじめとする上海在住歐米學者と親交をもったのも、おそらくはこの図書館を舞臺としてのことであった筈である。得意とする語學力によって、學者たちとの交流は活潑であった。この上海における二年足らずの留學期間は、狩野がもっともヨーロッパ東洋學に接近した時代であったといえるかもしれない。後年、上海時代を回顧して、當時は俞樾や孫詒讓も生きていたのに、會おうとしなかったのは惜しいことであったと漏らしたと伝えられているが<sup>23</sup>、この時代の狩野の姿勢を窺うことができる。ただし上海在住歐米學者の學問については、さして感服した様子はなく、むしろエドキンスの淺薄な語源説などにはほとんど着いていけなかったことを思わせる<sup>24</sup>。狩野が歐米の東洋學に、ある種の同感を覺えたとすれば、それは古い教條としての日本漢學にはない清新な方法と新分野開拓への意欲とであったであろう。

内藤湖南と親交を深めたのもこの上海時代であった。當時朝日の記者であった湖南は中國旅行の途次、上海に立ち寄ったとき、しばしば狩野と往來した。寧波の天一閣にも一緒に旅行したりした。それまで二人は面識がある程度の付き合いであったが、この旅行で「非常に親しくなった」という<sup>25</sup>。もちろんこの時点では、後年京都大學でたがいに同僚となることは知らない。

## 京大着任前後

明治三十六年四月に歸國。もともと新設豫定の京都大學教授としての準備を兼ねた留學であったが、一向に文科大学が開設されないため、臺灣總督府による臺灣舊慣調査事業である『清國行政法』の編纂に従事した。法科大学教授織田萬が責任者であり、同じく編纂を助けた人物に後の東大教授で中國經濟史の第一人者となった加藤繁がいた。清朝の制度を詳しく勉強する機会に恵まれたことで、學問に廣がりができた。後に出版された講義録『清朝の制度と文學』を見ると、制度と文學の関わりという、かつてない新しいテーマが提起されていて、『清國行政法』の仕事が狩野の學問形成にかなり大きな影響があったことがよく分かる。

また傍ら明治三十八年には立命館（當時は京都法政専門學校と稱した）<sup>26</sup>に附設されていた東方語學校で「時文」の講義をした。「時文」というのは、中國の役所の公文や商用或いは一般の手紙文など、口語の要素を交えた文體の總稱であり、一昔前には應用中國語の科目としてかならず存在したものである。普通の漢學者の苦手とするところで、そのため中國経験もあり、中國語にも堪能な狩野に仕事が回ってきたのであろう。そこで教えた學生の一人が、當時法科大学の學生であった小島祐馬である。テキストは新聞の切り抜きや條約文などであったが、小島によればその講義は「極めて明快で一點の含糊曖昧もない」ものであった<sup>27</sup>。

明治三十九年、ようやく文科大学が開設され教授となった。初年度は哲学科しか學生募集をしなかったために、哲学科で支那哲學史を擔當し、二年後、文學科開設とともに支那語學支那文學の擔當も兼ねた。「支那哲學史」「支那文學史」の普通講義の他、明治四一年以降、特殊講義として「清朝學術」「論語研究」「清朝經學」「公羊研究」「左傳研究」「孟子研究」「支那小説史」「支那戲曲史」

<sup>23</sup> 「座談會『先學を語る』狩野直喜博士」『東方學』第四十二輯（昭和四十六年）頁一三九。

<sup>24</sup> 同上。

<sup>25</sup> 「内藤君を偲んで」『讀書叢餘』頁一八九。

<sup>26</sup> 小島後掲文による。ただし中川小十郎によって創立された「私立京都法政學校」は、明治三十六年「私立京都法政専門學校」に組織變更されたものの、さらに翌明治三十七年には「私立京都法政大學」に改稱されているから、これは小島の覺え違いか、或いは實際の名稱變更にも関わらず、一般には相變わず「京都法政専門學校」と呼ばれていたかのどちらかである。

<sup>27</sup> 「通儒としての狩野先生」『東光』第五號、頁十～十一。

「清朝文學」「清朝の制度と文學」「兩漢學術考」「魏晉學術考」を講じた<sup>28</sup>。これらはほぼすべて没後に整理刊行されている。

初期の學生として、哲學科では武内義雄（明四三卒）、小島祐馬（明四五卒）、本田成之（大二卒）等があり、文學科では青木正兒（明四四卒）、橋本循（六七卒）等がある。東大から京大の大学院に移ってきた倉石武四郎（大一年京都に来る）や吉川幸次郎（大五卒）はやや後の學生である。

大學教授とはいうものの、その風采はまことに揚がらなかった。五尺に満たない短軀で、服装には無頓着、頭髮に櫛は用いず、ネクタイも曲がりっぱなしであった。「狩野君はイナカの村長さんのようで」であったという某氏の言もある<sup>29</sup>。また実際に事務員と間違えたという青木正兒氏の回顧談も伝わっている<sup>30</sup>。しかしその風貌とは裏腹に、學生からは絶大な尊敬をあつめ、多くの俊秀を世に送り出したばかりでなく、清朝考證學を機軸とする、いわゆる京都學派の領袖として、中心的な地位を占めた。

## 敦煌學の草創

文科大学が創設された時期の京都には、新しい學問に對する氣運が沛然として起こりつつあった。とりわけ東洋學では、朝日新聞の記者であった内藤湖南を招聘するなど、清新な雰圍氣が横溢していた。東京とは異なる特徴を發揮し、新しい學風を打ち立てようという一致した氣持が充満していたのである。

さてフランスのポール・ペリオは、イギリスのスタインに遅れること一年、一九〇八年の二月敦煌莫高窟に到着、窟寺の調査を行うとともに、住持王圓籙から數千卷の古寫本を入手した。ペリオは寫本をフランスに送り出した後、一旦ハノイに歸ったが、翌年ハノイ極東學院から派遣され、書籍を購入するため再び中國にやって來た。その時、北京のグランドホテルで歓迎會が催された際、所獲寫本の一部數十點を來會の學者たちに見せたのである。一九〇九年九月四日のことであった。そのニュースが、羅振玉や田中慶太郎<sup>31</sup>から京都の學者に伝えられると、一大センセーションを巻き起こした。なにしろ千年以上昔の古書古寫本が大量に出現したというのであるから、新しい研究材料に極めて敏感であった新興京都大學の教授連にはまことに刺激的な報告であったに違いない。内藤や狩野は早速北京の羅振玉から寫眞を送ってもらい、同年十一月岡崎の京都府立圖書館で開催された史學研究會第二回大會において展觀に供した。併せて小川琢治、内藤湖南、富岡謙藏、濱田耕作、羽田亨、桑原隲藏ら文科大学のスタッフたちが、それぞれ得意とする項目につき説明に當った。狩野の擔當は「老子化胡經」であった<sup>32</sup>。

明けて翌一九一〇年（明治四十三年）、藏經洞に残された經卷がすべて北京に運ばれたというニュースが傳わると、もはや居ても立ってもおられず、文科大学では五名の教授を北京に派遣して調査に當たらせることになった。派遣員は狩野をはじめとして内藤、小川、富岡、濱田といった顔ぶれであった。この時の北京行で調査し得たものは、ごく一部の寫本、それもほとんどが佛典ばかりで、實際には期待していたような材料の發見に至らず、敦煌寫本の調査という面では、完全な失敗に終わった。しかし敦煌學への熱氣はいよいよ盛り上がりこそすれ、決して衰えることがなかった。翌一九一一年の二月には、盛大に報告展覽會が開かれたが、それ以上に敦煌熱を助長したものは羅振玉・王國維師弟が日本にやって來たことである。同年十月、中國に辛亥革命が勃發すると、彼ら

<sup>28</sup> 『狩野教授還暦記念支那學論叢』の巻頭に載せる「狩野教授著作年表」に據る。

<sup>29</sup> 高瀬武次郎上掲文、頁六五。

<sup>30</sup> 「君山先生と元曲と私」『東光』第五號、頁十五。

<sup>31</sup> 田中慶太郎は東京外國語學校支那語科の卒業、中國書專門古書肆文求堂の主人で、當時北京に在った。教堂生の名で書いた「敦煌石室中の典籍」『燕塵』第二年第十二號（一九〇九）は、その經緯をヴィヴィッドに傳えていて、敦煌學草創期の重要文獻になっている。

<sup>32</sup> その時の講演原稿は補訂版『支那學文叢』頁三八六～三八九に見えている。

は西本願寺門主大谷光瑞の資金援助のもと、狩野・内藤等に迎えられて京都に假寓を求めたのである。その後、羅・王兩氏と京都の學者たちのあいだに頻繁な學的交流が行われ、京都の地で敦煌學が創始されるのは多くの人の知るところである<sup>33</sup>。王國維は滯日五年にして上海へ去ったけれども、羅振玉は一九一九年天津に遷るまでそのまま京都に留まった。

狩野自身は、一九一二年（明治四十五年）九月、ヨーロッパ留學に出發する。北京からロシアを経由してパリに着いたが、一年有餘の期間に、スイス、イタリア、オーストリア、ドイツ、ベルギー、オランダ、イギリスなど各國を精力的に駆けめぐった。圖書館で書物を見たり、學者に面會したりと慌ただしい日々であったが、この旅をきっかけにヨーロッパの學者たちとの幅広い交遊が始まった。もちろんパリ・ロンドンではシャヴァンヌやペリオの協力のもとに、親しく敦煌寫本の調査をすることができた。中國・日本を通じて現地で敦煌寫本の調査を行った最初の學者ということになる<sup>34</sup>。以下、本人の言葉を借りると、「ペリオ氏の作りたる目録（の抄寫）… やっと十二月一パイ完成致し、これは日本への土産と存候。それから今月に至って小生の面白く感じ候ものを選びて少しづつ見、又其中には一部を寫取り候ものも有之、何さま千五百餘通の事なれば到底盡く見る譯には參り不申。又ペリオ氏が寫眞をする考へのものは跡廻はしに致候が、其中にも面白きもの不尠、此等八歸國の後御話申上度存居候。小生最初にベ氏を訪問致候節、羅君へ送るとて寫眞せしものを一覽致し、これは已に羅君の手に入り老兄等も御一覽の事と存候。論語鄭注の如き誠に珍の珍なものにて、經學の上より見れば非常な事と存候。」「今日閱覽致候敦煌遺書のうちに西本願寺西晉寫經と同一なる字體のもの有之候。寫經の珍なもの其外に澤山有之候へども、小生は寫經以外のものを見、到底寫經に及ぶ暇無之、残念に存候。陸徳明釋文尚書も亦面白く、これは一部抄寫致置候。演義類の斷片と宋雜劇の起源と思はれ候斷片（時代は五代若しくは宋初ならん）も有之。毎日山陰道中を行くか如く應接に暇無之、其他に見物も致さねば相成不申、大に疲勞仕候」というような次第であった<sup>35</sup>。狩野の興味が經學と俗文學に集中していて、佛典にはまったく手を付けなかったことがわかる<sup>36</sup>。文中に挙げられた「尚書釋文」の研究は歸國後、「唐鈔古本尚書釋文考」<sup>37</sup>として世に出た。

歸國後、大正二年十一月二十七日の支那學會において早速「敦煌發掘物視察談」と題する報告を行ったが、残念ながらその内容については詳しいことが伝わっていない。その後も、「敦煌遺書に就て」を支那學會第四回大會（大正六年十二月二日）において、「敦煌の遺書に就て」を同第十二回大會（大正十四年六月十三日）においてそれぞれ講演している<sup>38</sup>。

狩野が敦煌寫本中から自身の研究課題として選んだものは、經學の材料以外には戲曲小説史に関わるものであった。次に、そのことに觸れよう。

<sup>33</sup> このあたりの事情は神田喜一郎『敦煌學五十年』（筑摩書房、一九六〇）に詳しい。

<sup>34</sup> ちなみに狩野は往路ベルリンを経由、同地に五日ほど滞在した時、コズロフによる黒城發見品も眼にしている。「又前便に申上候コツロフ甘肅の發掘は、學術上の價値より申候へば、分量は少なけれども敦煌と匹敵すべきものと被思申候。西夏語掌中字彙、西夏文字經卷、唐契大方廣華嚴經、北宋契本列子斷片、宋契呂觀文進注莊子、雜劇零本（これは一寸寓目したるのみにて斷言は出來不申れども何となく宋契らしく有之、例の古今雜劇よりも板式舊く有之萬一宋契ならば、これこそ、海内の孤本元曲の源流に一大光明を放つもの也。惜しきことには紙破損多し）宋契廣韻の斷片、至正の年號ある書簡など、我輩敦煌黨には涎の流るゝものにて、目下翰林院にて整理中に候。」「（『海外通信』『藝文』第四年第一號（一九一三）補訂版『支那學文叢』頁三三四。）オルデンブルグ所獲の敦煌寫本は、この時點ではまだ届いていない。ここに言及される雜劇零本とは『劉知遠諸宮調』のことであり、狩野が還曆を迎えたとき、ネフスキーとアレクセイエフの盡力によってレニングラードから寫眞がもたらされ、狩野に贈られた。

<sup>35</sup> 『海外通信』『藝文』第四年第四號、補訂版『支那學文叢』頁三三五～三三七。

<sup>36</sup> 狩野による敦煌寫本調査は三冊のノートとして残されていて、補訂版『支那學文叢』の巻頭寫眞にその極一部が掲げられている。

<sup>37</sup> 『藝文』第六年第二號（一九一五）のち『支那學文叢』に所収。

<sup>38</sup> 最後の講演についてだけは原稿が残っており、『支那學文叢』の一九七三年補訂版に載せてある。

## 俗文學研究への視點

敦煌寫本のなかで、早くから注目を集めた文獻の一つに變文をはじめとする俗文學の作品があるが、狩野はもっとも早くその價值に注目した學者である。ヨーロッパから歸國後しばらく経った大正五年に「支那俗文學史研究の材料」を發表し<sup>39</sup>、みづから寫して歸った幾つかの作品を學界に紹介した。「英國のスタイン氏、佛國のペリオ教授等が前後して敦煌の千佛洞より得た六朝より宋初にかけて鈔寫された經籍、佛典、歴史、地理、文學に關する卷子萬を以て數ふるうちに、些少なから俗文學に屬する鈔本がある。即ち雅俗折衷體若しくは口語體で書かれた散文若しくは韻文の小説が発見された。私は往年英佛二京の博物館及び圖書館で敦煌遺書の研究をなしたる所、偶然之を見て喜び禁ずる能はず、乃ち其一部分を寫して筐底に藏して歸った。……私が此鈔本に對して尤興味を感ずる理由は、それが唐末か五代に書かれたものであることで、換言すれば之によつて、唐末若しくは五代に元朝以後の俗文學の根芽が已に出來て居た事が分るからである」といい、「唐太宗入冥記」「秋胡變文」「伍子胥變文」「董永變文」などを取り上げたのである<sup>40</sup>。これらは主として通俗小説の起源が、遠く唐末五代にまで遡ることを主張する根據として取り上げられたもので、もちろん變文などという言葉は用いておらず、變文の構成や起源、演出方法などに説き及んでいないことは、時代的制約から如何ともし難いが、敦煌文學研究史上の記念すべき最初の論考であることは疑いがない。しかし残念なことに、この論文の歴史的意義に對する評價は敦煌學史の分野でもなお十分でない。

狩野の敦煌俗文學研究にいち早く呼應したのは王國維である。王國維は、狩野の持ち歸った録文に據つて數多くの敦煌寫本跋文を書いたが、その中に「唐寫本韋莊秦婦吟」「唐寫本殘小説跋」があり<sup>41</sup>、またやや後に「敦煌發見唐朝之通俗詩及通俗小説」を書いた<sup>42</sup>。王國維は、狩野が「如何なる題目のものか分からぬ」として擧げた斷片を、『北夢瑣言』に引く「内庫燒爲錦繡灰、天街踏盡公卿骨」の句がこの狩野の録文にも見えることによつて「秦婦吟」と決定している。

敦煌本に限らず、戲曲小説といった俗文學の研究に先鞭を付けたのは、やはり狩野と王國維であった。狩野は京都大學から派遣されて北京に敦煌寫本の調査に赴いた際、王國維と始めて出会うのだが、當時大學で元の雜劇を講じていた關係もあり、すでに『曲録』『戲曲考原』を著し戲曲研究に手を染めていた王國維とはすこぶる話が合った<sup>43</sup>。王國維は日本に來て一兩年のうちに『宋元戲曲考』の著述を完成させたが、その後は再び戲曲には関わらなかつた。一方、狩野は明治四十三年以降、毎年のように元曲の講讀を行い、昭和三年に退職するまで十七年間これを繼續した<sup>44</sup>。日本では幸田露伴や森槐南が元曲の紹介を行っていたが、學問的な研究對象としてこれを取り上げたのは狩野が最初であり、その後京都大學における中國文學研究の傳統の一つとなった。

戲曲にかんする論文、「琵琶行を材料としたる支那戲曲に就いて」<sup>45</sup>「水滸傳と支那戲曲」<sup>46</sup>「元曲の由來と白仁甫の梧桐雨」<sup>47</sup>は明治末に集中して書かれており、あるいは王國維からの刺激があったものと推測される。これらは後にすべて『支那學文叢』に収録されている。狩野はまた、

<sup>39</sup> 『藝文』第七年第一號・第三號（一九一六）。後、『支那學文叢』に収録。また汪馥泉による漢譯が『中國文學研究譯叢』（北新書局、一九三〇）に載せられている。

<sup>40</sup> 今、便宜上、王重民『敦煌變文集』の題名を借りて用いる。

<sup>41</sup> 王國維の敦煌寫本に關する論考は纏めて『觀堂集林』卷廿一に載せられている。

<sup>42</sup> 『東方雜誌』第十七卷第八號（一九二〇）。

<sup>43</sup> 「王靜安君を憶ふ」に、「私は王君と支那戲曲問題を問答して南曲北曲を論じた」とある。『藝文』第十八年第八號（一九二七）のち補訂版『支那學文叢』に収める。

<sup>44</sup> 青木正兒前掲文、頁十七。

<sup>45</sup> 『大阪朝日新聞』明治四十三年一月八日より連載。これは明治四十二年十二月の支那學會における講演「琵琶行にもとづける元雜劇」が基礎になっている。

<sup>46</sup> 『藝文』第一年第五號（一九一〇）。これももとは京都大學文學會における講演「水滸傳の材料」（明治四十一年十二月）である。

<sup>47</sup> 『藝文』第二年第二號・第三號（一九一一）。

羅振玉の蔵書を借りて『古今雜劇三十種』を覆印出版した<sup>48</sup>。

戯曲ばかりでなく、小説においても狩野の貢献は特筆すべきものがある。それは『紅樓夢』の研究に手を着けたことであり、「支那小説紅樓夢に就きて」は『大阪朝日』に連載された文章であるが<sup>49</sup>、中國學者の研究よりも先行している。こうした狩野の俗文學への視点は、おそらく早くからヨーロッパの中國學に親しんだところに由来するものであろう。ヨーロッパの中國學では、プレマール (Joseph-Marie Prémare) などイエズス會士以來、戯曲小説に興味を寄せるものがあり、十九世紀以降フランスを中心として確立したシノロジーの傳統中には、文學への關心は相変わらず高いものがあつた。狩野の論文や「中國小説史」「中國戯曲史」などの講義録を見ると、ジャイルズの『文學史』<sup>50</sup>や、ジュリアン (Stanislas Julien)、バザン (Antoine Bazin)、デービス (John Francis Davis) 等の翻譯にしばしば言及していることから、このことは想像されるのである。

## 東方文化事業への参畫

狩野の晩年において最も大きな意味を持つ仕事は、東方文化事業への参畫であろう。義和團の賠償金を基礎とする對支文化事業特別會計法が大正十二年 (一九二三) 三月三十日に制定され、事業遂行の必要上、同十二月諮問機關として對支文化事業調査會が設置されると、服部宇之吉とともに委員となった。上述のように、服部・狩野の二人は廿數年前、北京籠城を経験した當事者であり、この巡り合わせには感慨ひとしおであつたに違いないが、客觀的に見れば、東西兩京の大學に中國學を講じている彼らの立場からすれば當然の人事でもある。いずれにせよ、この文化事業は狩野にとっては普段より抱いていた考えを實現する絶好の機會であり、使命感をかき立てる種類のものであつたことは間違いない。

當時、事業のあるべき姿について狩野が提示した意見書が残されている。そこには先ず「支那に於ける文化施設は兩國間の直接利益を全く顧慮せざること。支那の排日的感情を除去する等の目的を基礎として此事業を創めざること」が強く主張されている<sup>51</sup>。學問を政治の道具としてはならぬというのが、その一貫した考えであつた。外務省側には往々にしてこのような傾向が見られたのであり、この見解の相違が後の東方文化研究所獨立への伏線となる。

中國側と協同して文化事業を立ち上げる上で、圖書館の建設や人文科學・自然科學の研究所を設立するという大まかな構想はあつたが、具體的に何を行うべきかについては、調査會でも一向に成案を見ななかつた<sup>52</sup>。ともあれ大正十四年五月には東方文化事業總委員會が成立し、いよいよ日中の協同事業がスタートすることとなつた。同年十月九日より十二日に至る四日間、北京北海靜心齋において東方文化總委員會第一回會議が開催され、狩野は服部とともに参加した。出席者は、委員長柯劭忞、中國側委員として王樹枏以下十名、日本側は入澤達吉 (東大醫學部教授) 以下七名であつた。この委員會の名稱については、中國側が「對支」の文字を嫌つたため、どのような名稱にするかにつき議論があつたが、これを「東方文化」とする提案をしたのは狩野であつたという<sup>53</sup>。十一日の會議で、人文科學研究所の研究事項を経學、史學、哲學、文學、法制經濟、美術、宗教、考古學、言語學の九門に分ち、その細目は北京委員會に於て決することが定められた。さらに狩野が「人文

<sup>48</sup> 京都帝國大學文科學部叢書第二集 (一九一四)。

<sup>49</sup> 『大阪朝日』明治四十二年一月十日、十七日。補訂版『支那學文叢』頁三二〇～三二七。ほぼ同内容のものが英文でも發表されている。“On the Authorship of the Hung-lou Méng and the Date of its Composition”, *The Katsujin*(活人), 1-1(1908), translated by B.Mitsui(三井武之助)。

<sup>50</sup> Herbert Allen Giles, *A History of Chinese Literature*, London, 1901.

<sup>51</sup> 「小島祐馬舊藏「對支文化事業」關係文書」『人文』第四六號 (一九九九) 頁四〇。

<sup>52</sup> 服部や狩野が相談して最初に決めたことは四庫全書の翻刻出版であつた。しかし外務省は經費の問題と中國にも同じ企畫があることなどから終始消極的で、結局實現の方向には向かわなかつた。このあたりの事情は、小黒浩司「續修四庫提要纂修考」『中國文人論集』(明治書院、一九九七)に詳しい。

<sup>53</sup> 「橋川時雄氏インタビュー記録」(特定研究「日中文化摩擦」報告 E-4、一九八一年) 頁三二。

科學ノ研究ニハ研究資料ヲ蒐集スル必要アリ。而テ資料中最モ重要ナルハ各種ノ圖書ナリ。圖書ノ蒐集ニハ多くノ經費ト時間トヲ要スル處、自分ハ第一着手トシテ、一、續四庫全書の編纂、二、四庫全書ノ補遺ヲ行ヒ度、いことを主張したところ、柯劭忞委員長も「狩野委員ノ說ニ大賛成ナリ」ということで採決された<sup>54</sup>。次いで、大正十五年七月二七日臨時總會において「東方文化事業總委員會章程」が議定され、同十一月東京で開かれた第二回總會では「東方文化圖書籌備處章程」も決定された。さらに翌昭和二年（民國十六年）十月には總委員會臨時總會において「北京研究所暫行章程」の規定が出来、研究所の人事も決定<sup>55</sup>、いよいよ四庫全書續修事業を開始することになった。

かくして北京人文科學研究所は順調なスタートを切るかに思われたが、昭和三年（一九二五）五月、第二次山東出兵（濟南事變）が勃發すると、中國各地で排日運動が巻き起こり、その結果として東方文化事業總委員會の中國側委員は、柯劭忞委員長を始めとして全委員が脱退通告をして來た。かくして北京の事業は一頓挫を餘儀なくされ、最終的には日本側だけによる歪んだかたちで行われざるを得なくなるのである。そのような状況下において、當初計畫された日中協同の一大研究所構想は水泡に歸したが、瀨川淺之進、橋川時雄のような適材を得て、上記四庫全書續修提要編纂の仕事は辛うじて繼續され、結果、北京の研究所が残した唯一の成果になるわけである。その間、狩野は圖書籌備委員として、色々と盡力を惜しまなかつたし、京大停年後はこの事業のために北京に常駐するつもりもあつたらしい<sup>56</sup>。

北京の人文科學研究所の事業が行き詰まりを見せた頃、「支那及び我國ノ學者ニ學者ヲ以テ始メテ爲シ遂ゲラルベキ事業ガ政治ノ原因ヨリ充分ニ其能力ヲ發揮スル能ハズ、支那學者トノ協同研究亦恆ニ恃ム可カラズトセバ、茲ニ一ノ方法ヲ立テ、平時ニ於テハ北京文化事業所ト連絡ヲ保チ、相提携シ相策勵シ、共ニ文化ノ研究ヲ進メ、又縱令政局ノ影響ニヨリ北京ノ研究所ガ一時停頓シ、事業上ニ打擊ヲ與フルガ如キ場合アルモ、此ノ研究ヲシテ連續絶ユルコトナキノミナラズ、彌々其ノ能力ヲ發揮スルヲ期セシメザルベカラズ。是レ我國內ニ於テ支那文化研究機關ヲ設立セムトスル所以ナリ」として<sup>57</sup>、昭和四年四月、東方文化學院東京研究所・京都研究所が成立した<sup>58</sup>。當初、外務省の對支文化事業部長であつた岡部長景は、研究所は東京だけでよいのではないかという意見であつたが、服部宇之吉が「京都は中國研究の盛んなところでもあるし、狩野先生もおられるから」ということで、京都にも研究所を作ることになった、という話が傳わっているが<sup>59</sup>、眞偽のほどは明かではない。京都研究所は、經學文學、宗教、天文曆算、歴史、地理、考古學の各研究室からなり、その構成は、北京の研究所の計畫を大體踏襲したものであつた。東方文化學院創立と共に、狩野は學院の理事となり、併せて京都研究所の主任（所長）となつた。翌昭和五年の十一月九日京都市左京區北白川に新所屋が竣工し、開所式が行なわれた。そのロマネスク様式の白壁の建物は、今も京都大學人文科學研究所に受け繼がれ、その中庭には狩野の銅像が立てられている<sup>60</sup>。

しかし日華事變が起り時局が切迫してくると、軍部の壓力がしだいに増大し、古代中國の研究などは無用で、當面する對中國政策に直接役立つような現代中國の研究を行えという論調が盛んになってきた。外務省では折衷案として、これまでの研究は存續させ、それ以外に政策に有用な研究

<sup>54</sup> 外務省外交資料館所藏「總委員會關係雜件・總委員會總會關係」第一卷所收「東方文化總委員會第一回會議議事録」（大正十四年十月北京ニ於テ作成）による。

<sup>55</sup> 總裁は柯劭忞、副總裁に王樹枏、服部宇之吉、研究員には狩野直喜、安井小太郎、内藤虎次郎、王式通、王照、梁鴻志、賈恩紱、胡庸、湯中、楊策、江瀚、戴錫章、姜忠奎、劉培極、胡玉縉、何振岱、章華、徐審義という人々が名前を列ねた。外務省外交資料館「總委員會關係雜件」第一卷所收「東方文化事業總委員會ノ概況」（昭和十年一月橋川時雄執筆）による。

<sup>56</sup> 上掲「橋川時雄氏インタビュー記録」、頁三二。

<sup>57</sup> 『人文科學研究所50年』（一九七九）頁十に引く「當時の文書」による。外務省外交資料館に所藏する「支那文化研究所設立趣意書」とほとんど同じであるが、若干の字句の異同がある。

<sup>58</sup> 東方文化學院設立の経緯は、山根幸夫「東方文化學院の設立とその展開」『論集近代中國研究』（山川出版社、一九八一年）に詳しい。

<sup>59</sup> 服部宇之吉の嗣、服部武の談。「座談會『先學を語る』服部宇之吉博士」『東方學』第四十六輯（昭和四十八年）、頁一七九。

<sup>60</sup> 銅像は研究所が東方文化研究所と改稱、狩野が所長の職を辭した昭和十三年、その十一月に除幕式が行われた。

を追加するように提案してきた。小島祐馬の言葉を借りると、「東京は譯なくその希望を容れ、租界の研究や列強の支那投資の研究など四つばかり新研究題目を掲げましたが、京都ではそれを拒絶して當初の目的を貫徹し」たのである<sup>61</sup>。これは京都の一致した考えによるものではあったが、政治から學問の獨立を守ろうとする狩野の強い意思がなければ實現不可能であったことは言うまでもない。この件に関しては、外務省文化事業部當局と狩野のあいだに交わされた次ぎのような書信が残っている<sup>62</sup>。まず昭和十三年三月二日附岡田兼一文化事業部長から服部・狩野兩教授に宛てた公信「東方文化事業總委員會將來に關する件」の内容は以下のようなものである。「拜啓、陳者、支那ニ於ケル事態ノ變化ニ鑑ミ對支文化事業ニ關シテモ種々新ニ考慮スベキ必要ヲ認メラルル次第ナル處、東方文化事業總委員會事業ニ關シテハ今後如何ナル方針ノ下ニ之ヲ處理スヘキカ御意見拜承致度何分ノ儀御回示相煩度、此段御依頼得貴意候、敬具。」それに對する三月十八日附け狩野の返書は、「拜覆、本月二日附ノ尊書、昨日相達シ敬誦仕者、御下問ヲ蒙リ候東方文化事業總委員ノ將來應ニ爲スベキ事業ニツキテハ先般申出ノ通り、右委員御辭退致後ト雖、多少鄙見有之候ヘトモ、先ツ當局ノ此ニ對スル根本的ノ御方針ヲ承ハリタル上、御下問ニ拜答可致、何レ本月内上京ノ節種々拜教ヲ得タル後、鄙見ヲモ開陳致度、右御高照奉願、勿々敬具。」表面からは具體的な折衝の内容を窺うことは出来ないが、この狩野の返事から、委員を辭職した上で、外務省側の要望を斷固として拒否し、研究所の獨立を守ろうとする氣迫が感じられる。この四月、京都研究所は東方文化學院から分離獨立し、東方文化研究所と名稱を改め<sup>63</sup>、同時に狩野は所長を辭した。

## 結び

明治という時代はすべての學問に本質的な變革を求めたが、舊來の傳統が非常な重壓として存在した漢學のような分野では、その變革は決して容易ではなかった。明治末年、新たに京都に設置された文科大學は、その意味で漢學改革の實驗場となったものだといえる。京都では、狩野・内藤などの主導の下、清朝考證學を旗印に、ヨーロッパのシノロジーをも批判的に繼承した、獨特の中國學がしだいに形成されていった。狩野がその建設における理論的支柱でなつたのは間違いない。そこには狩野の學問が色濃く反映されている。俗文學研究や敦煌學の開拓者としての貢獻もまた大きいものがあるが、その業績には十分な考慮が拂われていない部分もあり、今後の再評價が必要であらう。

狩野の中國學の眞骨頂は、また中國を内側から見るという方法、すなわち中國人の價值觀を尊重し、中國の中國たる所以を解明するという點にあった。外部からは中國がぶれというような批評をうけかねないこの姿勢は、しかし狩野の中國學の根幹にかかわるものでもある。そして學問のための學問を主張し、手段としての學問に極力反對した。晩年の政治的介入に對して毅然たる態度を貫いたのは、そのもっとも顯著な現れである。

狩野は、明治という時代に際會して、新しい中國學を模索した。その没後既に五十數年、日本の中國學は今日またしても大きな轉換點に立っている。さらなる變革をめざすとき、われわれは狩野直喜という存在に對し、もう一度客觀的かつ公正な學史的評價を試みる必要がある時期かも知れない。小文は、もとよりその役割を果たし得る資格はないが、今後の研究の捨て石になれば幸いである。

<sup>61</sup>小島祐馬「狩野先生の學風」、頁一六五。

<sup>62</sup>外務省外交資料館「總委員會關係雜件」第二卷所收。

<sup>63</sup>分離獨立に際して、京都研究所は京都大學への移管を希望したが、豫算の問題もあり、實現しなかつた。しかしこれまでの経緯もあり、獨立、名稱變更に至るのである。『人文科學研究所五十年』頁三九。

## 附録

### 略年譜

明治元年 (1868) 狩野直恆の三男として熊本に出生。

明治一二年 (1879) 同心學舎 (後の濟々巒) に學ぶ。

明治一七年 (1884) 上京、神田共立學校 (後に東京開成學校) で英語を學ぶ。

明治一九年 (1886) 大學豫備門 (一高) に入學、同學に小川琢治あり。

明治二五年 (1892) 東京帝國大學文科大學漢學科に入學、島田篁村らに師事。同期に藤田豊八あり。

明治二八年 (1895) 東京帝大漢學科卒業。正則中學校、東京外國語學校などで教鞭を執る。

明治三三年 (1900) 文部省留學生として北京に赴く。近く京都に開設される文科大學の教授たるべき準備であったという。着後程なく義和團の變に際會して籠城。變終息の後、一旦歸國。

明治三四年 (1901) 嗣いで上海に留學。亞州文會に出入して西籍に親しみ、またエドキンス (1823-1905) をはじめとする歐米學者と交わる。

明治三六年 (1903) 歸朝、京都に居住。文科大學がなお開設されなかったため、法科大學教授織田萬をたすけ、『清國行政法』の編纂に従事。同事に加藤繁あり。

明治三八年 (1904) 京都法政専門學校 (後の立命館) で支那時文を講義。聽講生に小島祐馬あり。

明治三九年 (1906) 文科大學開設、教授となる。哲學科において支那哲學史を擔當。

明治四一年 (1908) 文學科開設、支那語學支那文學擔當を兼任。

明治四三年 (1910) 北京に出張し敦煌寫本を調査。同行に内藤、小川兩教授および富岡、濱田兩講師あり。

明治四五年 (1912) 九月より翌年までの一年間、ロシアを経由して歐州に留學。この間、フランスを中心として、イギリス、オランダ、ベルギー、オーストリア、イタリアを歴訪、彼地の漢學家と交流。

大正一四年 (1924) 帝國學士院會員。また東方文化事業總委員會委員を委囑さる。

昭和三年 (1928) 停年により退官。

昭和四年 (1929) 東方文化學院京都研究所主任 (所長) となる。

昭和十年 (1935) 佛國アジア協會名譽會員。

昭和一三年 (1938) 東方文化學院京都研究所長を辭す。

昭和一九年 (1944) 文科勲章受章。

昭和二二年 (1947) 十二月十三日逝去。

### 著作

『支那學文藪』一九二七年弘文堂、一九七三年補訂版 (みすず書房)

『讀書叢餘』一九四七年弘文堂、一九八〇年補訂版 (みすず書房)

- 『中國哲學史』一九五三年岩波書店
- 『兩漢學術考』一九六四年筑摩書房
- 『魏晉學術考』一九六八年筑摩書房
- 『支那文學史』一九七〇年みすず書房
- 『論語孟子研究』一九七七年みすず書房
- 『漢文研究法』一九七九年みすず書房
- 『御進講録』一九八四年みすず書房
- 『清朝の制度と文學』一九八四年みすず書房
- 『支那小説戲曲史』一九九二年みすず書房
- 『春秋研究』一九九四年みすず書房

生前に刊行された著書は、最初の二種のみで、他はすべて没後の編集になる。これら各書の巻末解説はどれも狩野の學問・經歷を知る上ですこぶる有用である。また詩文集として、以下のものがある。

- 『君山文』昭和三十四年
- 『君山詩艸』昭和三十五年

#### 参考文献

- 「狩野教授著作年表」『狩野教授還暦記念支那學論叢』昭和三年弘文堂
- 『稱觴集』昭和三年二月、狩野教授還暦記念會刊
- 『東光』第五號（狩野直喜先生永逝記念號、昭和二十三年四月）
- 「狩野君山先生略譜」『東方學報・京都』第十七冊、昭和二十四年十月
- 「座談會『先學を語る』狩野直喜博士」『東方學』第四十二輯（昭和四十六年八月）所載、のち吉川幸次郎編『東洋學の創始者たち』（昭和五十一年講談社）に収録
- 狩野直禎「狩野直喜」『しにか』一九九一年九月號、のち江上波夫編『東洋學の系譜』（一九九三年大修館書店）に収録
- 『君山先生藏書目錄』 昭和二十八年、京都大學人文科學研究所
- 『狩野文庫目錄』 昭和三十九年、京都大學文學部圖書室